

|   |  |             |          |
|---|--|-------------|----------|
| 1. 科目名 (単位数)  | 臨床心理学研究法特論 (2 単位)  | 3. 科目番号     | PSMP5247 |
| 2. 授業担当教員   | 石川 清子  |             |          |
| 4. 授業形態   | 講義・演習  | 5. 開講学期     | 春期       |
| 6. 履修条件・他科目との関係   |  | 履修形態 (通信教育) | R        |
| 7. 講義概要   | <p>質的研究方法によって修士論文を書くために、質的研究方法の意義と方法論を学ぶ。また現象学的心理学の観点に立って日常に起きている現象を見ることによって、将来心理臨床家になって、一人一人のクライアントを大切に丁寧な関わりを持つと考えている院生にとって、本講義は大きな意義をもつものである。</p> <p>具体的な質的研究方法としては、観察法、インタビュー法、ディスコース法、エスノグラフィーを中心に、エピソード記述法、再詳述法、GTA 法など基本的な方法を学ぶ。また、それらの方法論のバックグラウンドをなしている現象学的な考え方として、マーティン・ハイデガー、メルロ・ポンティ、ルードヴィヒ・ウィットゲンシュタインの考え方などを学ぶ。したがって本講義により、質的研究の在り方つまり人間理解の根本を理解することを目指す。</p>  |             |          |
| 8. 学習目標   | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 質的研究方法と量的研究方法の違いを学ぶ。</li> <li>2. 研究方法の意義を学び、質的研究方法によって修士論文が書けるようにする。</li> <li>3. フィールドノーツの記述、エピソード記述法 M-GTA 法に慣れる。</li> <li>4. 質的研究法の代表的な 5 つのアプローチを学習し、その独自性を理解する。</li> <li>5. 体験的学習を通して、質的方法論における限界と可能性に対する理解を深める。</li> </ol>  |             |          |
| 9. アサインメント (宿題) 及びレポート課題                                | シラバス「14 学習の展開及び内容」の各テーマを参照。  |             |          |
| 10. 教科書・参考書・教材  | <p>【教科書】<br/>Banister, P. 1994 <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i> ((『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』2008) 新潮社</p> <p>【参考文献】<br/>鯨岡峻著『エピソード記述入門』東京大学出版会、2005<br/>無藤隆著『質的研究の三つのジレンマ「再詳述法」の提案による質的心理学的可能性』質的心理学研究 (第 4 号 58-64) 新曜社、2005<br/>木下康仁『ライブ講義 M=GTA:実践的質的研究法』弘文堂、2007<br/>佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社、2009<br/>Giorgi, A. (ed.), <i>Phenomenology and Psychological Research</i>, Pittsburgh: Duquesne University Press. 1985<br/>Creswell, J. W. <i>Qualitative Inquiry &amp; Research Design</i>, London: Sage Publications. 2007<br/>Hayes, N. <i>Doing Qualitative Analysis in Psychology</i>, UK: Psychology Press. 1997</p> |             |          |
| 11. 成績評価の規準と評定の方法                                       | <p>○成績評価の規準<br/>上記の目標 1～5 を達成できること。</p> <p>○評定の方法<br/>発表レジュメ 20%、研究レポート 30%、ファイナルレポート 50%</p>  |             |          |
| 12. 受講生へのメッセージ  | 質的研究方法は、自分の内面を振り返ることにつながり、楽しく挑戦的です。何よりも、心理臨床の実践に役立ちます。   |             |          |
| 13. オフィスアワー   | 第 1 回目の講義でお知らせします。   |             |          |
| 14. 学習の展開及び内容【テーマ、学習の目標、学習の内容、キーワード、学習の課題、学習する上でのポイント等】 |  |             |          |
| 1. テーマ  | 質的心理学研究法について、オリエンテーション   |             |          |
|   | <p>【学習の目標】質的心理学研究法とは、出来上りが固定化した概念にとらわれることなく、ある現象の豊かさ(本質)を捉え、つかみ取ろうとする方法である。言い換えれば、日常生活の中に生きている人々のありのままの姿から、当たり前になっている事柄を再検証し、根本的な人の生き様を深く見つめて行くことである。それは臨床心理士を目指す院生にとって最も身近な方法論とも言える。そこで、1 回目では教科書『質的研究法入門:リフレキシビティの視点』1 章によって、質的研究の定義とその歴史的背景を見ていく。さらに、質的研究を実施するとき、研究方法論が陥りやすい問題点を認識することは研究者として重要な姿勢である。従い、質的研究法の始まりとその問題点を確認し、リフレキシビティの視点について理解していく。</p> <p>【参考文献】 Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i>, 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』2008) 新潮社<br/>佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社、2009</p>  |             |          |
| 2. テーマ  | 質的研究が目指すもの: 実存論と存在論<br>ハイデッガー、メルロ・ポンティ、ウィットゲンシュタインの人間論   |             |          |
|   | <p>【学習の目標】質的研究の方法論は哲学的な知見が背景にあって方法論として成立するものである。特に現象学の知見は質的研究法に大きな影響を与えているといっても過言ではない。本講義は、ヘーゲルに始まりハイデッガーにいたる現象学の歴史的背景を理解し、この世界の中に存在し、日常生活を営んでいる人間をどのように見て行くべきなのか哲学者たちの見解を見て行く。これらの知見を知ることで、なぜ人を研究テーマとした時に質的研究が重要なのか理解できることを目指す。</p> <p>【参考文献】 稲田智己『存在の問いと有限性: ハイデッガー哲学のトポロギー的究明』晃洋書房、2006<br/>メルロ・ポンティ (滝浦静雄・木田元訳)『見えるものと見えないもの』みすず書房、2004<br/>Dreyfus, H.L. <i>Being-in-the-World</i>, Cambridge: The MIT Press. 1991<br/>Wittgenstein, L. <i>Philosophical Investigations</i>. New York: Macmillan Publishing. 1966</p>   |             |          |

|         |   |
|---------|---|
| 3. テーマ  | 観察法   |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』の2章より様々な研究方法を学んでいく。ここでは、観察法を使った質的研究のデータ収集の仕方、分析法とその過程で研究者が注意しなければならない点を理解する。また、各章を分担して割り当てるので、院生各自がまとめて発表すること。   |
| 【参考文献】  | Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i> , 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』2008) 新潮社<br>佐藤郁哉『フィールドワークの技法: 問いを育てる、仮説をきたえる』新潮社、2002<br>鈴木裕久『臨床心理研究のための質的方法概説』創風社、2006   |
| 4. テーマ  | フィールドワーク1   |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』の2章を参考に、フィールドにて関心があった出来事を観察し、または、映像に収めてくる。質的データとして分析しまとめてきた題材をもとに、再詳述法によりその実際を再吟味する。現象の持つ豊かさをどのように伝えられるかを確認し、同時に言葉の持つ意味と限界に気づき、自己が持つ従来のバイアスについて学ぶ。院生各自の考察を発表する。  |
| 【参考文献】  | Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i> , 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』2008) 新潮社<br>佐藤郁哉『フィールドワークの技法: 問いを育てる、仮説をきたえる』新潮社、2002<br>鈴木裕久『臨床心理研究のための質的方法概説』創風社、2006   |
| 5. テーマ  | エスノグラフィー  |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』の3章よりエスノグラフィーを学んでいく。ここでは特に参与観察法を使った質的研究のデータ収集の仕方、分析法とその過程で研究者が注意しなければならない点を理解する。また、各章を分担して割り当てるので、院生各自がまとめて発表すること。   |
| 【参考文献】  | Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i> , 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』2008) 新潮社<br>佐藤郁哉『フィールドワークの技法: 問いを育てる、仮説をきたえる』新潮社、2002<br>鈴木裕久『臨床心理研究のための質的方法概説』創風社、2006   |
| 6. テーマ  | フィールドワーク2   |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』の3章を参考に、「日常」という自己の生活の場の出来事を参与観察し、フィールドノーツにまとめ質的データとして分析する。結果としてまとめてきた題材をもとに、その実際を再吟味する。現象の持つ豊かさをどのように伝えられるかを確認し、同時に言葉の持つ意味と限界に気づき、自己が持つ従来のバイアスについて学ぶ。院生各自の考察を発表する。   |
| 【参考文献】  | Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i> , 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』2008) 新潮社<br>無藤・やまだようこ・南・麻生・サトウ編著『ワードマップ 質的心理学』新曜社、2008<br>(1-1、2-2、3-1、3-3、4-1~4-4、5-1~5-2 参照のこと。)  |
| 7. テーマ  | インタビュー  |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』の4章よりインタビュー法を学んでいく。ここではインタビューによるデータ収集の仕方、分析法とその過程で研究者が注意しなければならない点を理解する。また、各章を分担して割り当てるので、院生各自がまとめて発表すること。   |
| 【参考文献】  | Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i> , 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』2008) 新潮社<br>Monk, G., Winslade, J., Crocket, K., & Epston, D. <i>Narrative Therapy in Practice: The archaeology of Hope</i> . 1997 (国重・バーナード 訳『ナラティブ・アプローチの理論から実践まで: 希望を掘り当てる考古学』北大路書房<br>J.マクレオッド『物語としての心理療法: ナラティブセラピーの魅力』誠信書房、2007   |
| 8. テーマ  | フィールドワーク3   |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』の4章を参考に、インタビュー法を実施し、データ収集、逐語の作成、分析の実践を通し、その手続きを理解する。   |
| 【参考文献】  | Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i> , 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビティの視点』2008) 新潮社<br>Monk, G., Winslade, J., Crocket, K., & Epston, D. <i>Narrative Therapy in Practice: The archaeology of Hope</i> , 1997 (国重・バーナード 訳『ナラティブ・アプローチの理論から実践まで: 希望を掘り当てる考古学』北大路書房<br>J.マクレオッド『物語としての心理療法: ナラティブセラピーの魅力』誠信書房、2007<br>無藤・やまだようこ・南・麻生・サトウ編著『ワードマップ 質的心理学』新曜社、2008<br>(1-1、2-2、3-1、3-3、4-1~4-4、5-1~5-2 参照のこと。) |
| 9. テーマ  | エピソード記述法、再詳述法、M-GTA 法   |
| 【学習の目標】 | 何らかの現象の観察、また何らかの手記やドキュメンタリーの採取、またはインタビュー(個人、グループ)に基づいて得られたデータをもとに、M-GTA を実施し、それぞれの理論的概念を適切に表すストーリーをエピソード記述法と再詳述法により説明する。ある現象を記述し考察することに際して、その現象の豊かさをどのように伝えるべきか、従来の見方の変革につながる考察を考える。  |
| 【参考文献】  | 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂、2003<br>佐藤郁哉『フィールドワークの技法: 問を育てる、仮説を鍛える』新曜社、2002<br>尾見康博・伊藤哲司『心理学におけるフィールド研究の現場』北大路書房、2001<br>フォルスタイン, J.A. (山田富秋他訳)『アクティブ・インタビュー: 相互行為としての社会調査』せりか書房、2004<br>マクレオッド, J. (野村晴夫訳)『物語としての心理療法: ナラティブ・セラピーの魅力』誠信書房、2007  |

|         |  |
|---------|--|
|         | <p>無藤・やまだようこ・南・麻生・サトウ編著『ワードマップ 質的心理学』新曜社、2008<br/>(1-1、2-2、3-1、3-3、4-1~4-4、5-1~5-2 参照のこと。)</p> <p>Creswell, J. W. <i>Qualitative Inquiry &amp; Research Design</i>. London: Sage Publications, 2007</p> <p>Feyerabend, P. <i>Against Method</i>. London: VERSO, 1990</p> <p>Van Manen, M. <i>Researching lived experience: Human science for an action sensitive pedagogy</i>. Albany: State University of New York Press, 1990</p> <p>Giorgi, A. (ed.), <i>Phenomenology and Psychological Research</i>. Pittsburgh: Duquesne University Press, 1985</p>  |
| 10. テーマ | ディスコース分析   |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビリティの視点』の6章よりディスコース分析を学んでいく。ここでは言語が構造化されて意味やディスコースが生み出される仕方を解明する。テキストの分析法とその過程で研究者が注意しなければならない点を理解する。また、各章を分担して割り当てるので、院生各自がまとめて発表すること。  |
| 【参考文献】  | <p>Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i>, 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビリティの視点』2008) 新潮社</p> <p>V.バー (田中一彦訳)『社会構造主義への招待: 言語分析とは何か』川島書店、1997</p> <p>百武正嗣『気づきのセラピー』春秋社、2009</p> <p>鈴木聡志『ワードマップ 会話分析・ディスコース分析: 言葉の織りなす世界を読み解く』新総社、2007</p> <p>Creswell, J. W. <i>Qualitative Inquiry &amp; Research Design</i>. London: Sage Publications, 2007</p> <p>Feyerabend, P. <i>Against Method</i>. London: VERSO, 1990</p> <p>Van Manen, M. <i>Researching lived experience: Human science for an action sensitive pedagogy</i>. Albany: State University of New York Press, 1990</p> <p>Giorgi, A. (ed.), <i>Phenomenology and Psychological Research</i>. Pittsburgh: Duquesne University Press, 1985</p>  |
| 11. テーマ | パーソナル・コンストラクト・アプローチ  |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビリティの視点』の5章よりパーソナル・コンストラクト・アプローチを学んでいく。ここでは量的な手法として扱われているレパートリー・グリッドをはじめラダリング法、ABCモデル、セルフ・キャラクターゼーション等の多角的な分析法を用いる意味と効果を理解する。また、各章を分担して割り当てるので、院生各自がまとめて発表すること。  |
| 【参考文献】  | <p>Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i>, 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビリティの視点』2008) 新潮社</p> <p>杉山憲司・堀毛一也『シリーズ・心理学の技法 性格研究の技法』福村出版、1999</p> <p>Creswell, J. W. <i>Qualitative Inquiry &amp; Research Design</i>. London: Sage Publications, 2007</p> <p>Feyerabend, P. <i>Against Method</i>. London: VERSO, 1990</p> <p>Van Manen, M. <i>Researching lived experience: Human science for an action sensitive pedagogy</i>. Albany: State University of New York Press, 1990</p> <p>Giorgi, A. (ed.), <i>Phenomenology and Psychological Research</i>. Pittsburgh: Duquesne University Press, 1985</p>  |
| 12. テーマ | アクションリサーチ  |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビリティの視点』の7章よりアクションリサーチを学んでいく。ここでは本アプローチの歴史的背景と研究の信念を理解する。また、各章を分担して割り当てるので、院生各自がまとめて発表すること。  |
| 【参考文献】  | <p>無藤・やまだようこ・南・麻生・サトウ編著『ワードマップ 質的心理学』新曜社、2008 (5-7 参照のこと。)</p> <p>S.ケミス・R. マクタガート著『参加型アクションリサーチ』(N.K. デンジン・Y.S. リンカン編『質的研究ハンドブック第2巻: 質的研究の設計と戦力』平山満義漢訳、藤原顕編訳、北大路書房、2006に収録)</p>  |
| 13. テーマ | フィールドワーク4  |
| 【学習の目標】 | 第9回の講義に基づき、フィールドワークとして得られたナラティブ等のデータをエピソード記述法、再詳述法、M-GTA法と使って分析する。   |
| 【参考文献】  | <p>木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂、2003</p> <p>佐藤郁哉『フィールドワークの技法: 問を育てる、仮説を鍛える』新曜社、2002</p> <p>木下康仁『M-GTA: 質的研究と記述の厚み』弘文堂、2009</p>   |
| 14. テーマ | 質的研究の在り方: 論文としてまとめるには  |
| 【学習の目標】 | 教科書『質的研究法入門: リフレキシビリティの視点』9章・10章によって、質的研究の独自性について確認し、陥りやすい問題点を認識し、倫理的問題点にも認識を深める。  |
| 【参考文献】  | <p>Banister, P. (ed.), <i>Qualitative Methods in Psychology: A Research Guide</i>, 1994 (五十嵐靖博 監訳『質的研究法入門: リフレキシビリティの視点』2008) 新潮社</p> <p>無藤隆 他『質的心理学』新潮社、2004</p> <p>Monk, G., Winslade, J., Crocket, K., &amp; Epston, D. <i>Narrative Therapy in Practice: The archaeology of Hope</i>, 1997 (国重・パーナード 訳『ナラティブ・アプローチの理論から実践まで: 希望を掘り当てる考古学』北大路書房)</p> <p>Creswell, J. W. <i>Qualitative Inquiry &amp; Research Design</i>, London: Sage Publications, 2007</p> <p>Feyerabend, P. <i>Against Method</i>. London: VERSO, 1990</p> <p>Van Manen, M. <i>Researching lived experience: Human science for an action sensitive pedagogy</i>. Albany: State University of New York Press, 1990</p> <p>Giorgi, A. (ed.), <i>Phenomenology and Psychological Research</i>. Pittsburgh: Duquesne University Press, 1985</p> |
| 15. テーマ | まとめ  |
| 【学習の目標】 | ここまで学んだことを復習する。そして、自分の関心のある研究テーマに結びつけて、質的研究方法によって修士論文を書けるようにしていく。  |